

# 加賀の千代女 年譜

年号	年	干支	西暦	年齢	事項	時の流れ
元禄	16	癸未	1703	1	松任（現在白山市八日市町）の表具師福増屋六兵衛の娘として生まれる。	去年12月、赤穂浪士吉良邸討入浪化没
正徳	4	甲午	1714	12	本吉（現在白山市美川町）の大睡（支考門）のもとで俳人として修行。	涼菟金沢に遊ぶ
享保	4	己亥	1719	17	8月24日、美濃の各務支考は知角を伴い千代女を訪問。支考は「 <b>行春の尾のそのままの杜若</b> 」「 <b>稲妻の裾をぬらすや水の上</b> 」の千代女の席題句に「あたまから不思議の名人」と称賛。	支考『俳諧十論』刊行
享保	5	庚子	1720	18	金沢の福岡某に嫁ぐ。このことに関し、金沢大衆免（現在金沢市森山1丁目）の大組足軽、福岡弥八説あり。（一方、不嫁説あり）	
享保	6	辛丑	1721	19	6月、尾張蕉門の雄、沢露川が北陸に行脚し、金沢で会う。	
享保	7	壬寅	1722	20	春、夫に死別し、実家に帰る。「起きて見つ寝て見つ蚊帳の広さ哉」（『其使』元禄7年刊）は浮橋の句。 6月、露川と燕説の北陸行脚の俳諧選集「北国曲」（巻耳撰）に初めて掲載される。	
享保	10	乙巳	1725	23	春、京の東本願寺に参詣。伊勢俳壇中川乙由を訪問し入門。数日間滞在。 小松の宇中（支考門）が「伝千代女書」刊行。	支考、芭蕉三十三回忌追善興行 秋色没 この頃に宇中没
享保	11	丙午	1726	24	4月、紫仙女を訪門し俳諧連歌2巻を成し、行善寺（現在白山市北安田町）に奉納。この連歌は美濃派の小松の俳人兎路により『姫の式』として編集出版。 美濃の堀部魯九（露川門）は「松任千代女を訪ねて」と前書し、旅人に落馬なさせそ美人草と詠む。このころ中央の名士と交流意識高まる。	園女没
享保	12	丁未	1727	25	春、師の支考に俳句行脚を勧められた美濃の蘆元坊里紅が千代女を訪ね、俳諧撰集『桃の首途』（1728）の「松任短歌行」成る。	
享保	17	壬子	1732	30	初夏、上洛し、乙由と再会。	前年（享保16年）支考没
元文	2	丁巳	1737	35	10月7日 法名釈宗和は父か（「福増屋法名軸」）。	この頃蕪村、巴人に入門
元文	4	己未	1739	37	3月24日 法名釈尼妙は生母か（「福増屋法名軸」）。	紫仙女没、乙由没
元文	5	庚申	1740	38	この頃、千代女の俳諧活動はは目立たない。	小春没
寛保	3	癸亥	1743	41	9月20日 釈永了は兄か（「福増屋法名軸」）。	芭蕉五十回忌追善、燕説没
延享	3	丙寅	1746	44	6月、涼袋は千代女を訪問し、「市中に婦人の産をわすれざるを感じて」と近況を語る。	加賀騒動収束、大和の千代女没
延享	4	丁卯	1747	45	伊勢の麦浪（乙由の長男）訪問。	蘆元坊没
寛延	元	戊辰	1748	46	俳諧に復帰し、句の掲載さる俳書数多い。鶴来金劔宮奉納額に「松任表具屋千代」と記し、里朝、珈涼、山叩、大睡等ともに句を奉納。	
宝暦	4	甲戌	1754	52	10月、剃髪し素園と号し、居室を草風庵と称したと伝わる。	百川没
宝暦	5	乙亥	1755	53	5月、山本氏（大聖寺藩本陣、松任の米屋八左衛門）墓碑に、悼句を刻す。	
宝暦	10	庚辰	1760	58	3月、金沢東別院の親鸞上人五百回忌法要に参詣。9月、越中井波瑞泉坊に参詣。その途次、津幡の見風宅に立寄り、小松の黒瀬屋山叩に消息す。	
宝暦	11	辛巳	1761	59	3月、東本願寺宗祖五百回御遠忌に珈涼と上京し参詣。4月、歌人内山逸峰は千代尼と対面して、「夜ふくる迄かたりぬる」と記す。（「報恩詣都紀行」）。この頃、狩野派画人達と多くの合作軸を作る。	
宝暦	12	壬午	1762	60	1月25日 法名釈了和は兄または弟か（「没福増屋法名軸」）。 3月末、越前の吉崎御坊に参詣、「吉崎紀行」をまとめる。養子六兵衛（白鳥）を迎えたのはこの頃か。	
宝暦	13	癸未	1763	61	8月末、第十一次朝鮮通信使の来朝に藩命による懸物6幅、扇子15本を書き上げる。「鶉だち」（麦水編）「霞がた」（見風編）に序文を書く。	蘭更「花の故事」で蕉風復帰を提唱
明和	元	甲申	1764	62	既白編の「千代尼句集」乾坤2冊（藤松因序・半化蘭更跋。546句載録）刊行。	
明和	2	乙酉	1765	63	2月、飛騨の千尺の求めにより「飛州十景絵巻」に賛句を書く。3月、歌人内山逸峰再訪し一泊。 4月、越中の康工編「俳諧百一集」刊行され、千代の画像ありて、若い頃を偲ばせる目元すずやかな老尼姿に描かれ、知友に見せたりする。	
明和	5	戊子	1768	66	自撰の76句を浄書した「自撰真蹟俳諧帖」成る。	
明和	7	庚寅	1770	68	「施主名録発句集」（義仲寺芭蕉堂中所在三十六人肖像）に智月尼の画像と題句書く。	
明和	8	辛卯	1771	69	既白編の千代尼句集後編「俳諧松の声」（坡仄序。半化坊蘭更跋。327句載録）刊行。 冬、「曲尺」序文を書く。4月加舎白雄は紫雨、虎杖を伴い北陸、関西の途次千代女訪問。	麦水、蘭更ら古調運動に一石を投じる 珈涼没
安永	3	甲午	1774	72	8月「たまま集」（蕪村編 119名44句載録）の序文を書く。	涼袋没
安永	4	乙未	1775	73	3月、思想家高山彦九郎千代女訪問。9月8日、病没。 時世句： <b>月も見て我はこの世をかしく哉</b>	大睡没